

卒業時調査報告書の刊行にあたって

社会学部長 尾嶋 史章

2005年に社会学部が生まれて、8年が経過します。この間、今年卒業する学生を含めると通算5期、約2000名の卒業生を送り出したこととなります。学年が二回りして、ようやく社会的にも認知される存在になってきたというところでしょうか。

この卒業時調査は、2008年度（平成20年度）に文部科学省・教育GPに「相互啓発による創造的学力育成カリキュラム—学生による評価と相互チュータリングの試み—」が採択されたのを機に、社会学部の教育成果を評価する方法の一つとしてスタートしました。幸いなことに、この年度末が社会学部第1期生（2005年度入学生）の卒業と重なったため、結果として社会学部卒業生のすべてをカバーする調査となったのです。

現在、世の中は「評価」ばやりです。自己点検・自己評価、学生による授業評価、研究プロジェクトの外部評価など、多様な評価システムがこの10年あまりの間に大学にも入ってきました。こうした評価は、よりよい大学教育を目指し、あるいはよりよい授業を目指して、さらによりよい研究を作り上げるために、標準的な基準を用いて個人なり組織を評価する傾向があります。こうした標準は、「競争的な」選抜には効果的ですが、個別的な目標の評価には必ずしも向いていません。

社会学部は多くの学科が実習科目を持ち、現実的な問題に向き合って勉学を進めていく、実証的で人間中心の社会科学という特徴を持っています。このため同志社教育の理念である「キリスト教主義」「自由主義」「国際主義」という柱も、他学部の教育での実現の仕方とは異なると考えられます。この意味で教育評価にも、個別性が必要になります。あとの報告をご覧くださいとわかるようにここでの分析視角は、標準的評価を意識しつつ個別的评价を取り入れた形となっていて、この調査は、同志社大学社会学部のユニークさをも評価できる形になっています。こうした「新しい」形の教育評価調査ができるようになったのは、鶴飼先生、小林先生をはじめこのプロジェクトに参加した社会学研究科院生の努力の賜です。その意味では、報告書自体が、社会学部・社会学研究科の一つの教育成果なのです。

同志社の社会学部らしさを追及するために、その評価資料を提供する重要なツールとして、今後もこの調査が継続することを願っています。

